

自分の人生を生きる

福井大学教育学部附属義務教育学校 九年 荒木 愛理

最近、気が付けば私の名前を呼んでくれない、祖父。七年前に、祖父はレビー小体型認知症とパーキンソン病を発症しました。症状は筋力低下による歩行困難、人や動物が見える幻視症状、認知機能の低下によるレム睡眠行動異常などがあります。祖父は、介護が必要な状態で祖母と母、私で介護をしています。特に私は食事のサポートや、入浴の準備、歩行の介助をしています。私の祖父は些細なことで機嫌を損ねたり、生活音に敏感であったりします。その為、気を張っていないといけないことが多く、常に祖父を優先する生活を送っています。私のように本来大人が担うとされている家事や家族の世話などを日常的に行っている十八歳未満の子どものことをヤングケアラーと言います。二〇二一年の厚生労働省の調査では、十七人に一人がヤングケアラーと言われており、学校のクラスに二人はいる計算ですが、中学生の八〇%がヤングケアラーという言葉を認知すらしていませんでした。この調査は、昨年初めて実施されましたが、問題が注目されてからまだ日が浅く、支援体制の整備が課題となっています。ヤングケアラーになる原因は、介護を担う大人の手が家庭内にいないことにあります。具体的には、

超高齢化社会による要介護者の増加、三世帯同居率の低下、専業主婦世帯の減少、ひとり親家庭の増加などが挙げられます。

ヤングケアラーは自分がヤングケアラーだと分かるまで時間がかかり、外部からも分かりにくいと言われています。実際、私もこの言葉を初めて聞いたときは自分がヤングケアラーであると気づいていませんでした。この問題が長期化することで勉強する時間が減り、進路選択が限られ夢をあきらめてしまう子どももいます。早期発見のためにも周りの大人たちや、自治体の協力は不可欠で、自助、共助、公助が一つになって子どもたちを守る必要があります。

私は、これらの防止策として二つのことを提案します。まず一つ目は、悩みをシェアできる場所の提供です。祖父の介護をしていると、介護者としてストレスを感じることがあります。しかし、私は介護をしていることやそれからくるストレスについて誰とも話せていません。介護の悩みを誰かに共有したくても、電話相談窓口は勇気がいり、活用できていません。私のように若い世代には電話より、スマートホンやタブレットなどにより身近なので、匿名で自分たちの気持ちを共有したり相談したりできるアプリがあれば良いと思いました。介護を全く考えない時間、共感のコメント、それだけで救われる人も大勢いるはずです。ヤングケアラー世代にあった対応が必要だと考えます。ヤングケアラーの支援が進んでいるイギリスでは、三〇年

前から定期的にヤングケアラー同士が集まってイベントが開催されています。そのイベントでは、介護を忘れて子どもらしく遊んだり、自分の将来のことを相談したりできます。また、家族訪問や支援団体の担当者やヤングケアラーの1対1の面談などもあり、いつでも相談できる環境が整っています。そのためイギリスの子どもたちは、自分がヤングケアラーであることを誇りに思っています。

二つ目に、介護を中学校の科目に導入することです。日本では二〇三六年には三人に一人が六五歳以上という、超高齢化社会が待ち受けています。私は実際、祖父をベッドから起こすときや、転倒した際の力の入れ方や支え方がわからず苦勞しました。車いすの使い方や歩行の補助、食事時に気をつけることなどを授業に取り入れるべきだと思います。祖父の介護をしていて、介護する際の技術は実際に行って学んでおくことが大切だと感じました。また、祖父がかかったような病気に関する知識も身につけておくと、いつ介護の問題に直面しても心に少し余裕を持って対応できると思います。介護の事を学ぶことにより、年齢や性別に関係なく介護に参加することが当たり前になり、全員が当事者意識を持つことができるはずです。介護者が介護を受ける世代になっても有益だと考えます。これから迎える超高齢化社会をみんなで支えていくには、学校の授業で介護について学ぶことが重要だと思います。

現在の日本は、介護が必要な人を対象とした支援の方が注目されています。しかし、ヤングケアラーの支援も同時に必要です。厚生労働省の方針では新しい取り組みとして、スクールソーシャルワーカーを通じて、ヤングケアラーの情報が自治体に伝わるという仕組み作りが進んでいます。私も悩みを躊躇わず誰かに相談できる社会、子どもが子どもでいられる社会を実現したいと考えます。悩みを共有できる場所、介護の授業を導入することで、ヤングケアラーが将来の夢を持ち、自分の人生に誇りを持って生きていく社会を共に実現していきましょう。